
立ち上がれ！ 超機兵！

つあぎ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

立ち上がれ！ 超機兵！

【コード】

N1764E

【作者名】

つあぎ

【あらすじ】

地球を襲う異星人から、地球を守れ！熱血ロボットもののお話です。

立ち上がれ！ 超機兵！

プロローグ

榎出歩かばいであゆむは、中学校の頃に、両親を無くした。

とはいっても、両親は死んだのではない。何かの研究をしていた両親は、紺色のパリツとした制服を着た体格のいい男達に連れ去られてしまったのである。

『時が来たら、この鍵で地下を開け、地球を守るのだ』
意味の解らない言葉を残して、両親はいなくなった。

それ以来、両親とは会っていない。毎月、郵便局の口座にはいくらかの生活資金が振り込まれているので、死んではいないのだろう。何で連れ去られたのか、しばらくの間考えていた。

が、榎出は物事を深く考えることは苦手であった。生きているのなら、それでいい。

そして、榎出が中学校を卒業するぐらいに

地球は異星人に襲われた。

異星人の圧倒的な戦力の前に、世界各地の都市は炎に包まれた。
巨大な人型兵器。

人型という、兵器としては全く意味が無く、価値も無い形状が、それらは世界を蹂躪した。

地上・空中問わずに高い機動力を發揮し、それは比較的薄い装甲を補って、既存兵器をかく乱しつくした。

立ち上がれ！ 超機兵！

そして、一つの都市を消し炭にするほどの火力。
各国軍は善戦した。結果、その撃墜キルレシオ対被撃墜比率は

50対1。

崩れ落ちる自由の女神。

焼けるエッフェル塔。

巨大兵器に蹂躪される万里の長城。

難民たちの巨大な墓標となった、タージマハールであった場所。

誰もいない大通りに、ただ時を知らせ続けるビッグベン。

各国の残存兵力は、その歴史的なしがらみを捨て、地球のために
各個協力するようになった。

そして生まれた「地球防衛軍」に、英雄が現れる。

日本の一研究所「高島研究所」が開発した、巨大人型兵器「アカ
シア」と、それを駆る男。

アカシアは従来の兵器の性能を大きく上回り、また、異星人の人
型兵器「機兵」を蹂躪できる、唯一の存在となった。彼等は、また
たく間に各地の火消しの存在として活躍を重ねる。

立ち上がれ！ 超機兵！

異星人もアカシアの活躍に閉口したのか、世界各地で一時的に戦闘が止んだ。

だが、それがかりそめの静穏だということは、世界の誰もが感じていた。

人々はただ、高い吊り橋を渡る時のように、おぼつかない、ぼんやりとした恐怖に駆られるのみであった。

立ち上がれ！ 超機兵！

第一話：椛出立つ！

く日本・熱血市

「では、行って参りますわ」

「気を付けて行ってらっしゃいませ、お嬢様」

真新しい制服に身を包んだ年頃の少女は、使用人にお辞儀をして、悠々と屋敷を後にした。

熱血市、いや、日本は、幸運にもこの戦争の被害を被っていない。いつもとさして変わらぬ日常を営んでいる。一般市民がこの戦争の影響を感じるのは、最近の物価高と、きな臭いニュース程度だ。

平和なものである。

少女 畠瀬はたせ爪つめ子は、今日が転校初日となる。屋敷の者は、車で送ろうとやっきになっていたのだが、これから毎日通う通学路。彼女は自分自身の足で、その道を感じたいのだった。

初夏の陽気。少々汗ばむほどだ。畠瀬はブレザーのポケットからハンカチを取り出し、額に薄く滲んだ汗を拭う。

鞆は体の前で両手で持ち、肅々と通学路を歩く。

……おかしい。

通学路にしては、学生の姿が見えない。チラ、と腕時計に目をやる。時刻は8時過ぎ。通学時間帯だ。今日は祝日でもない。

曲がり角にさしかかった。

立ち上がれ！ 超機兵！

「早くしないと遅刻するよ！ー！」

椛出は玄関から聞こえる弟の声を聞きながら、ぼんやりとトース

立ち上られ！ 超機兵！

トをかじりながら家の中を歩いてきた。技術者であった両親が残した、大きな家。地下もあるが、まだ開けてはいない。両親以外は地下に入ったことがないのだ。

両親が言った、「時」というのがわからないからであった。

「あーあ、何やってんだか、ったく……」

玄関には全く同じ顔をした妹と弟がいた。名前は妹が「優^{ゆう}」で、弟が「勇^{ゆう}」。双子だからと言って、何も名前の音まで揃える必要もないように感じる。小さい頃は二人とも同じ服を着ていたりもした。急かされながらも靴を履く。椀出の通っている「魂高校^{たましいこうこう}」は基本的に校則が緩く、制服などもあつてないようなものである。無論、靴や鞄も自由。

かといって、特にガラの悪い高校でもないのだが。

「つとに、朝弱いんだから」

椀出が出たのを確認して、優が家の鍵を閉める。三人とも鍵を持っているが、行きの戸締りは一番しっかりしている優が担当していた。

「じゃ、行ってくるねー」

「行ってくるよー」

揃って手を振る妹と弟に、やる気なさげに手を振り返す。妹と弟は手を繋いで学校へ通っていった。仲の良い姉弟だ。

椀出はぼんやりとトーストをかじりながら通学路を歩く。はて、他の生徒の姿が見えない。

まあいいか。そのうち出会うだろう。

トーストの味にも飽きてきた頃、曲がり角にさしかかった。

衝突。

出会い頭に、椀出と畠瀬は見事に衝突した。畠瀬がバランスを崩し、尻餅をつく。彼女は慌ててスカートを押さえた。

「いたたた……」

立ち上がれ！ 超機兵！

上目遣いで椀出を見る。やる気なげな表情だが、口に啞えたトーストは落としていない。卑しいというかなんとというか。
「大丈夫？」

椀出が手を差し出した。女としてはハスキー、男としては高めの声。髪型も顔立ちも、中性的という言葉のよく似合う人だ。

少しだけ心臓が高鳴る。そして、椀出の着ている制服と、自分の着ている制服は、同じブレザーであった。

これは、運命の出会いというものなのかもしれない。少しドキドキしながら、畠瀬は椀出の手を取った。柔らかい手だ。

「は、はい。すみませんわね、はしたないところをお見せしまして……」

「いや、前を見ていなかった私も悪い」

椀出はトーストを食べ終わったようである。そして、畠瀬が自分と同じ制服を着ていることに気付いた。

「魂高か？ 一緒に行くか」

「え、は、はいっ……」

言い終わるやいなや、椀出は大步で歩き出す。一般的な高校生女子程度の身長の畠瀬にとって、170センチほどの椀出、ましてや早歩きについていくのは、やや骨が折れる。

「ワタクシ、今日が転校初日なんですの」

「転校生か。何年だ？」

「一年ですわ」

「奇遇だな。私も一年だ」

「組は、三組と聞かされてますの」

「私も三組だ。じゃあ、仲良くしようか」

椀出が振り返り、笑顔を見せた。先ほどまでのクールそうな表情とは一味違う。畠瀬は不覚にもときめいてしまった。

「私は、椀出かほいで歩あゆむ。お前は？」

「わ、ワタクシは、畠瀬はたせ爪そしこ子と申しますわ！」

「そうか。よろしく、畠瀬」

「は、はいっ！ よろしくお願いしますわっ！」
何を初対面の男にときめいているんだろう。全くもってはしたない。

畠瀬は少しだけ自嘲しながら、椋出の後について歩いていった。

学校の校門は閉ざされていた。いや、半分だけ開いている。少しだけ見えるグラウンドでは、野球部が練習をしていた。

「あの、椋出君……？」

「……」

しばらく何か考えているような表情を浮かべる。畠瀬は心配になつて校門の表札を見してみるが、確かに「私立 魂高等学校」の文字が書いてあった。

「……」

椋出がおもむろに制服の胸ポケットから生徒手帳らしきものを取り出す。

「そうか。今日は創立記念日で休みだった」

「ええーっ！？」

創立記念日が休日。私立の高校にはありがちなことである。

が、転校の日にちを間違えたことは恥ずかしい。それ以上に、屋敷の使用者が大慌てで自分に謝つてきそうな気がする。

畠瀬は両親が居ない。長期海外出張と聞かされている。そして、今までは日本海沿いに住んでいたのだが、どうも朝鮮半島の戦況が怪しいらしく、太平洋側の熱血市に引越してきたのである。

畠瀬家の使用者はまだ若い。が、何かと責任感の強い女性である。今回のことは一生の不覚とばかりに謝ってくるに違いない。それは対応に困る。

「すまないな、どうやら私は間違えていたようだ」

「い、いえ、ワタクシもですから……」

立ち上がれ！ 超機兵！

「折角だ。街でも案内しようか？」
「え？」

「ただ帰るのも勿体無いだろう。ひよつとして用事でもあるのか？」
「い、いえっ！ 用事なんかありませんわ！ 喜んで案内させていただきますわ！」

「よかった」

椀出がはにかんだ。再び胸が高鳴る畠瀬。これはひよつとして、一目惚れということだろうか。

「じゃあ、行こうか」

椀出が畠瀬の手を握る。一気に顔が赤くなる畠瀬。慌てて握られた手を引っこ抜いた。

「ああ、悪い。歳の離れた妹と弟がいるから、手をつなぐのはクセなんだ。嫌だったか？」

「い、い、いえ、そんなことはありませんが……」

「まあ、驚かせて悪かった。じゃあ、行こうか」

椀出は数歩足を進めるが、畠瀬がついて来ていない事に気づき、足を止めて振り返った。

「あ、あの、迷いそうなので、その、手を、つないでいただけませんか？」

畠瀬が真っ赤になりつつおずおずと喋る。椀出はしばらくきょとんとした表情を浮かべた後、畠瀬の手を握る。

「なんだ、こんな田舎でも迷うのか。方向音痴なんだな」

「い、いえ、そういう訳では……きゃっ！」

畠瀬は椀出と手を繋いで、朝方の熱血市を探索することになった。畠瀬にとって、同年齢の異性と手を繋ぐなど、小学校低学年の頃の遠足以来である。

過保護な節もある使用人には、このことは黙っておこう。

畠瀬はかなりドキドキしながら、椀出と手をつないで朝方の熱血市を歩き回った。

立ち上られ！ 超機兵！

……とはいっても、所詮さえない地方都市である熱血市に、見て回るような場所などさしてない。ましてや徒歩だ。せいぜい駅とバス停と、大きなショッピングセンター程度だ。

「ここが私の家だな」

「へえー、大きい家なんですね」

桜出の家の前に立ち止まる二人。その時、爆音と振動が二人を襲った。

「畠瀬、危ないっ！」

畠瀬をかばうかのように、桜出が彼女に覆い被さる。畠瀬は思わずドキッとしながらも、空気の振動に思わず身をすくめた。

空を見る。そこには、巨人が居た。

有機的な曲線で構成された、人を模した兵器。

機兵である。

「……あ、あれ、機兵ではありませんの？ ニュースで見ましたわ！！」

「ああ、見たことがある。まさか、ここを襲いに来たのか？」

青い機兵の腕に握られた銃から、銃弾が吐き出される。それは、街を瓦礫に変えていった。

畠瀬が震えだす。無理も無い。テレビの向こう側の光景だと思っていたことが、目の前で起こっているのだから。

「……だ、ダメですわ……。ワタクシ達、死んでしまいますの……？」

「……」

桜出はポケットに入れている家の鍵を探る。家の鍵と、自転車の鍵の他についている鍵。そう、地下室の鍵だ。

立ち上がれ！ 超機兵！

立ち上がれ！ 超機兵！

『時が来たら、この鍵で地下を開け、地球を守るのだ』
父親の声がフラッシュバックする。椀出は鍵を握り締め、畠瀬の手を握った。

「畠瀬、来い！！」

「な、何ですの！？」

「地下室に行く！ ついてこい！！」

返事を聞く前に、椀出は走り出していた。

「ち、地下室って、何がありますの！？」

畠瀬は慌てながらも、椀出についていく。運動音痴な自分からは想像も出来ないほど走れた。どうなるかは解らないが、椀出についていくしか、選択肢は思い浮かばなかった。椀出家に土足で上がりこみ、地下への階段を駆け下りる。

階段の先には、物々しい扉があった。椀出は鍵を差し込み、捻る。扉が開いた。

その先には、大規模な工場のような場所が広がっていた。

「な、何ですの、これ……」

「私もわからん。地下に入るのは初めてだからな」

工場の中央には、ロボットが一台、そびえ立っていた。大きさは15メートルほどであろうか。ダンボールを組み合わせたような、立方体の集合した人型ロボット。外面は直線で形成され、正面の装甲は傾斜している箇所が多い。

なんでこのようなロボットが地下にあるのか、椀出は理解できなかった。が、考えるよりも先に、足は搭乗口へ続いている階段に向かっていた。

「椀出君、何をしているんですの！？」

「これを使って、奴らを倒す！！」

「動かし方とか解りますの！？」

「解らん！！」

「……む、無謀ですわ！！ 死に行くようなものですわよ！？」

「だが、私がやらないで、誰がこのロボットを使う！！ 私は、こ

の街を守ってみせる！！」

椀出が見せた毅然たる表情に、畠瀬は胸を少し高鳴らせる。

再び振動。天井から埃が舞い落ちた。椀出が迷い無く、搭乗口を開けて、ロボットに潜り込む。

「……………」

椀出は勇気があると思う。でも、自分はどうしようか。畠瀬は階段の下まで駆け寄るも、そこで躊躇する。

この街には引越してきたばかりだ。思い入れも何もない。

だが、この街には、自分の家には、姉のような存在であった使用人がある。彼女を死なせる訳にはいかない。

「……………椀出君、ワタクシも行きますわっ！！」

畠瀬が階段を駆け上がる。

「よし、後ろに乗ってくれ！！」

コクピットの中は意外と広かった。三人は乗れそうだ。壁には見慣れぬ計器ばかり。畠瀬は思わず目を回しそうになった。

椀出が操縦桿を握る。その途端、莫大な情報が椀出の脳に流れ込んできた。

解る。どうやって動かせばいいのかが、解る。ロボットの名前すらも。

なぜかは解らない。が、理解するのは後だ。

「……………『サクラ』、起動ッ！！！！」

レバーを捻る。ロボット「サクラ」のバイザー状のカメラアイが鈍い赤色の輝きを発する。

『おはようございます。メインシステム、通常モードを起動します。戦闘モードに移行しますか？』

計器類に灯が灯り、コンピューターが、起伏のない女声で喋りかけてくる。畠瀬は後席でおろるとマニュアルを読んでいた。

「移行する！」

『了解しました。戦闘モードに移行します。……………出撃準備、完了しました。出撃しますか？』

「する！」
『了解しました。出撃します』
振動と共に、目の前が開けていく。この通路がどこに繋がっているかわからないが、椀出は通路を歩かせる。その外見に恥じない、ゆっくりとした重厚な歩行。

「もろい！ やはり、もろすぎるな、この世界の建物は！」

機兵のスピーカーから異星人の声が響く。街は混乱の坩堝と化しており、その空にはただ単機で浮かんでいる機兵が仁王立ちのようなポーズを取っていた。

「アカシアはどうした、奴を出せ！！！」

「……そこまでだッ！！！」

機兵は眼下の道路を見下ろす。そこには、いつ現れたのか、巨大な豎穴が掘られていた。

そして、その穴の前には、巨大なロボット。

「……何者だ」

「お前らに名乗る名前など、無いッ！！！」

椀出がコクピットの中で啖呵を切る。

「これ以上の狼藉は、私を倒してからにしろッ！！！」

先ほどまでの椀出とは言葉の強さが全く違う。畠瀬は後席から椀出の変貌振りを興味深げに見守っていた。

「フン、なら、先にアンタからしとめさせてもらおうか！」

機兵が動き出す。と同時に発砲。

「椀出君、弾、弾！！！」

「わかってる！！！」

が、サクラの動きはぎこちない。弾丸は全て命中した。着弾の際に生じた煙で、機兵の視界は遮られた。

「ハハハ、どうした、いいのだぞ！」

高笑いを浮かべる機兵を背に、徐々に煙が晴れていく。

立ち上られ！ 超機兵！

立ち上がれ！ 超機兵！

そこには、傷一つ無いサクラが立っていた。

「な、じよ、冗談じゃ……!?!?」

「し、死ぬかと思いましたが……」

「……効かんナツ!!」

サクラが機兵を指差す。

「貴様の悪に染まった弾丸など、全て私の装甲が防ぎきった！ 私に正義の心がある限り、誰も私の装甲を貫くことなどできはしない!!」

『敵機、射程内です』

「喰らえツ、ハンドガトリング!!」

サクラの両手の甲からガトリングガンがせり出し、大量の銃弾をシャワーのように吐き出す。

「シヨルダーガトリング!!」

今度は両肩アーマーからガトリングガンがせり出し、大量の銃弾をシャワーのように吐き出す。

「必殺、モンスターガトリングツ!!」

背中に背負っていた2本の巨大なガトリングガンが前方へ展開し、大量の銃弾をシャワーのように吐き出す。

「凄いですわ……って、ガトリングしかありませんの!?!?」

「解らん!!」

『弾丸、命中確認。ダメージ、与えています』

サクラが放った弾丸はかなりの精度で命中し、機兵は被弾の度にガクガクと揺れ続けていた。大量の銃弾を浴びた機兵の各所から火花が散っている。

「クツ、このような兵器があるとは……。これは、あの方に報告せねばならぬ……」

機兵が背を向けた。

「桜出君、敵、逃げようとしているんじゃないやありませんの?」

「逃がすか!!」

『敵機、ミサイルの有効射程圏内です。ミサイル使用を提案します』

立ち上ぐれ！ 超機兵！

「よし、ミサイル発射ッ！！」

サクラの肩にあるミサイルポッドの扉が開き、ミサイルが3発発射される。それは機兵へ食いつき、機兵との接近を感知して爆発した。VTF（近接信管）ミサイルである。そして、爆風が機兵を巻き込み、もう一つの爆発を生み出した。

「……………やりましたの？」

爆煙が晴れていく。そこには機兵の姿はなく、ただ破片が落下しているのみだ。

『敵影の消失を確認しました』

「やったな」

実感が湧かないが、自分が機兵を倒した。あの、世界を破壊した悪魔の兵器を。

が、操縦桿を握っていた掌には、びっしりと汗をかいている。かつてない緊張っぷりだ。掌を制服のズボンで拭く。

「やりましたわね！ 凄いじゃないですか！！」

「よせ、そう褒めるな……………ん？」

素っ気ない電子音が聞こえた。椀出のポケットからである。

「……………電話じゃありませんの？」

「そうだな。ちよつとすまない、出る」

椀出が電話に出る。その後ろでは、畠瀬がやや熱っぽい視線を椀出へと送っていた。これはまさに、完全に一目惚れである。

「ああ、うん。わかった。とりあえず帰って来い。じゃあ」

椀出が電話を切った。

「妹からだ。『お姉ちゃん、大丈夫？』って心配してたよ」

「お姉ちゃん？」

畠瀬の中で、急速に何か冷めていった。と同時に、危うい感情が浮かび始めていた。

ひよつとして、まさか、自分は、椀出のことを男と間違えた上に、一目惚れをしてしまったとでもいうのか。

嫌な汗が流れていく。

「どうした？ 暑いのか？」

「い、いえ、なんでも、そう、何でもありませんわっ！！」
必死にその場を取り繕う畠瀬。

そう、自分は至ってノーマルな人間のはずだ。先ほどまでののは、
一時の気の迷いであろう。それというのも、男らしい椋出が悪いの
だ。

責任転嫁な気がしなくてもないが、とりあえず畠瀬はそう納得し
た。

『警告。足元に生体反応複数。銃を持っています』

「何だつて！？」

慌てて椋出はモニターを見る。そこには、紺色の制服を着た体格
のいい男たちが、サクラを囲んでいた。

「こちら、防衛軍だ。話を聴きたい。君達を基地まで連行する」

「これは依頼ではない。命令だ」

コクピットの中で、二人は顔を見合わせた。二人とも嫌な汗をか
いていた。

第一話：椛出立つ！（後書き）

畠：転校初日に休みと間違えるわ、機兵からは襲われるわ、散々ですわ……。

あげくの果てには防衛軍の方々に囲まれるし……。
ワタクシ、どうなってしまうの？

椛：大丈夫だ。生きてればなんとかなるだろう。

畠：そんなものでしょうか……。

椛：ところで、何で私を君付けで呼んでいたんだ？

畠：い、いえ、それはっ！！

椛：次回、「アザンの脅威！」お楽しみに！

畠：違いますのよ！ そういう訳では！！

椛：……どういう訳だ？

というわけで、全然完結させてないにも関わらず新作を投稿です。
頑張りたいたいですので、よろしく願います。

立ち上がれ！ 超機兵！

第二話：大いなる脅威！ アザン登場！

〔花園市・地球防衛軍日本支部〕

桜出と畠瀬は、見慣れぬ建物が並ぶ基地の中を男たちに囲まれて歩いていた。

彼女達の乗っていたロボット「サクラ」は、基地の格納庫に収まっている。人類最後の希望である兵器「アカシア」を擁している基地であるためか、設備は非常に整っていた。

「畠瀬、手は繋がなくていいのか？」

「だ、大丈夫ですわっ！！ この状況で迷子になんかなる訳ないですもの！」

この女は、今後毎回のように手を繋がなくていいのか聞いてきそうだ。本人に悪気はないだろうが、畠瀬としてはつい「男と間違えていたこと」を思い出してしまう。

どうやらこの基地は空軍基地を流用しているものようだ。滑走路脇には、日本の誇る最新鋭戦闘機「0式戦闘機」が4機並んでいる。ニュースで何度か見たのと、前身翼を採用した特徴的な形から、特に兵器に強い訳でない畠瀬でも覚えていたのだ。

先代の大統領が、制式採用をわざわざ1年遅らせて名付けさせた「0式」の名前。マニアは喜んだが、内部からの批判は非常に多かった。もともと、その1年で多くの初期不良を潰すことができたのだが、そこまで理解して批判した政治家は一人もいなかった。

そもそも、「強い日本を作る」と嘯っていた先代大統領に、味方は少なかつた。そして、大統領の任期を終えた後に起こった異星人との戦闘で、大統領は義勇兵の一人として欧州戦線へ参加。元空軍のトップエースであった彼はかなりの戦果を上げたものの、結局は行方不明となっている。

立ち上ぐれ！ 超機兵！

立ち上がれ！ 超機兵！

「ゼロ戦だな。少し前まで、弟が夢中になっていたよ」

「弟さんもいますの？」

「ああ。双子の妹と弟がいる。……あいつら、無事なんだろうか」
しばらく二人を沈黙が覆う。熱血市を襲っていた機兵はあの1機
のみのようだ。大丈夫だと信じたいが。

「大丈夫だ。この話が終わったら、君達はすぐに帰そう」

男達の先頭にいた男が、こちらに振り返る。中年ぐらいだろう。

やや出っ張った腹が、その年齢を示しているようだ。

「家族に一応連絡を取りたいのだが、できないか？」

「少し待つてほしい。家族の方も心配されているだろうが、話なら
すぐに終わる」

戦闘機のエンジン音。滑走路に0式戦闘機が3機着陸していた。

おそらく、別の都市の守りに行っていたのだろう。機兵相手に通常
兵器で立ち向かうのは厳しい。世界クラスの戦闘力を持つ0式でも、
それは変わらない。現在生き残っているパイロットは、エースか臆
病者か。

それゆえに、機兵を蹂躪できる存在である「アカシア」の役目は
大きかった。

「長官、お連れしました」

「うむ、入ってくれたまえ」

「失礼します」

重厚なドアが開いた先には、階級章をたくさんつけた初老の男が
座っていた。椋出達を囲んでいた男達が一斉に敬礼をする。

「まあ楽にしてくれたまえ。私は地球防衛軍日本支部長官の、むらくも
村雲むらくも
如月きんづきだ」

村雲が「外に出る」的なジェスチャーをする。その後、椋出達を
囲んでいた男は二人を残して部屋から出て行った。

「かけたまえ。君達に聞きたいことがいくつもある」

椀出と畠瀬は促されるがままに椅子に座る。座り心地は悪くなかったが、場所が場所だ。居辛い。

「熱血市を守ってくれたことは感謝する。君達がいなければ、熱血市は壊滅していたかもしれない。ありがとう」

村雲が礼をした。

「いや、当然のことをしたまでだ」

「……まったく、勇敢なお嬢さんだ。君のような人材が欲しいよ」

椀出が女であることを一目で見抜いた村雲に、人生経験の差を思い知らされる畠瀬であった。

「それでだ。どうして君達がああ……『サクラ』かね。あの機兵を動かせたのかね？」

「私もよくわからん。ただ、操縦桿を握ったとたん、操作方法が解った」

椀出の吐く言葉はあながち嘘ではない。彼女は「昔から知っていたかのように」動かしたが、過去にサクラを動かした記憶は全くなかった。存在自体も知らなかったのだ。

「私に聞きたいことがあれば、いくらでも聞くといい。でも、畠瀬は関係ない。たまたま私と同じ場所にいただけだ。彼女は早く帰してやってくれ」

椀出の言葉が終わると同時に、村雲の携帯電話が鳴る。

「失礼。……ああ、私だ。ふむ。その解除は……むう。なるほど、了解した。椀出君にも伝えておこう」

村雲が電話を切り、椀出の肩を叩いた。

「残念だが、君はずっとサクラを動かさなければならぬようだ」

「私が？」

「うむ。どうやら、君でないと動かせないようになってるようだ。そのコードを解除しようにも、あまりにも複雑で、相当時間がかかる」

「コード？」

「どうやら最初に動かした者でないと動かせないようだ。高島研究

立ち上ぐれ！ 超機兵！

所にも連絡はしておいたが、解除までの間、君に乗ってもらう他にない」

椀出がサクラに乗って、異星人達と戦う。ただの女子高生でしかない椀出が。

そんなの理不尽だ。畠瀬は思わず村雲に突っかった。

「なんで椀出さんがやらなければなりませんの！？ 椀出さんは、ただの女子高生ですわよ！？」

「我々としても、本来守るべき存在である君達に戦わせることには抵抗がある。しかし、サクラは敵の機兵を蹂躪できた。サクラは地球にとって必要な兵器なのだ」

「でも……」

「畠瀬、もういい」

椀出が畠瀬と村雲の間に割って入る。

「これも、私の運命なのだろう。ありがとう、心配してくれて」

椀出が笑顔を見せた。畠瀬は言葉を詰まらせる。

「村雲長官、私にできることなら、やってみる。でも、妹と弟は…

…」

「心配いらん。我々が守って……」

村雲の言葉を遮るかのように、基地内にサイレンが鳴り響く。

「長官、敵襲ですッ！！」

「何、来ているのか！！」

「ハイ！ 予測ではあと15分でここに到着します！！ 数はおよ

そ4機！」

「4機とは……大きく出たな……。早速だが、椀出君」

「解っている！ 私に任せろ！」

言い終わるやいなや、椀出は出口に向かって走り出す。畠瀬は少しの間、それを眺めていたが、すぐに椀出の後を追っていた。

「椀出さん、ワタクシもッ！！」

「畠瀬！？」

「ワタクシだって、サポート程度ならできますわ！！」

「……よし、頼むッ！」

急造のガレージには、サクラが立てひざの姿勢で座っていた。コクピットのハッチへつながっている梯子を駆け上がり、コクピットにもぐりこむ。畠瀬は下着が下から見えないか心配になったが、そんなことで躊躇している時間は無い。梯子が取り外される音がした。椀出が前席、畠瀬が後席に座り、椀出が起動スイッチを捻った。みるみるうちに計器類に灯が燈っていく。

『おはようございます。サクラ、通常モード起動します。戦闘モードへ移行しますか？』

「移行する！」

『了解しました。戦闘モードへ移行します。あと、挨拶は忘れないでいただきたいです』

コンピューターからのまさかのツッコミに、椀出と畠瀬は思わず顔を見合わせた。

「すまなかった。おはよう、サクラ」

「おはようございます、サクラさん」

モニターには「戦闘モード移行中……」との文字が出ている。椀出が操縦桿を握ると、むき出しの金属棒である操縦桿はひんやりとしていて、背筋にぞくつと来た。ゴムか何かを巻いてもらおう。それぐらいはしてもらっていいはずだ。

『戦闘モード移行完了。出撃します』

サクラがゆっくりと立ち上がり、急造のガレージの中をゆっくりと歩く。サクラが歩きたびに、ガレージ内の資材が揺れた。

>> 椀出さん、聞こえますか？ こちら、管制室です。私は管制官の川崎忍かわさきしのぶといます。以後、あなた方のバックアップを行いますね
<<

「ん、あ、すまない」

>> ちなみに、シノブっていうのは、忍者の忍、って書きます。二

ンニン、なんちてくく

川崎が照れくさそうに笑った。そのあと、無線から咳払いが聞こえてくる。

>>……北西に少々開けた場所があります。そこで迎撃……ああ、迎え撃つてください。こちらの戦力は最終防衛用として扱いますので、そちらには回せません。すみませんくく

川崎は先ほどの軽い感じとは全然違う、とても聞き取りやすい声を出した。例えるなら、ベテランアナウンサーのような落ち着いた感じ。さすがはプロということか。

「じゃ、じゃあ、ワタクシ達だけで戦いますの？」

>>いえ、現在『アカシア』が帰還中です。安心してくださいねくく
「ま、間に合わなかった時は？」

>>あ、そのときは諦めてください。チーンですよくく
他人事だと思つて。

思わず畠瀬は後席で呟いた。

「……畠瀬、空調の動かし方、解るか？」

「どうしましたの？」

「緊張してるせいかな、少し暑い。畠瀬は？」

「いえ、別に暑くはありませんが、椋出さんが暑いのでしたら、少し温度下げましょうか。えっと、確か……」

空調操作スイッチの場所は御丁寧にマニュアルに書いてあった。

そのページを読みつつ、畠瀬は空調の設定温度を少し下げる。コクピットの天井から冷風が吹きだしてきた。

「すまないな」

「いえ、操縦しているのは椋出さんですから」

>>そういえば、椋出さんと畠瀬さんはお友達ですか？くく

「え、いや、なんとというか……」

「ああ、友達だ」

椋出と畠瀬が出会ったのは今日だ。故に畠瀬は「友達」という単語を使うのに少し躊躇した。が、椋出は何のためらいもなく、その

立ち上がれ！ 超機兵！

単語を口にした。

何気に嬉しい。畠瀬は後席でちよつとだけ笑顔になっていた。

>>そうですか。高校時代の友達は一生涯の友達になりますから、大事にしてくださいね<<

「そうだな。……ところで川崎さんは今、いくつなんだ？」

椀出の問いかけの後、場を沈黙が包んだ。

>>……敵影、接近してきますね。機種は………<<

しばらくして、川崎が喋った。極めて事務的。少々機嫌を損ねたか。

「気まずいですわね……」

『女性に年齢を聞くのは禁物ですよ』

「すまない」

>>……『ザカート』が3機、もう1機は到着が遅れている模様です。好機です<<

「ザカート？」

>>熱血市に現れた、一般的な機兵です<<

有機的な曲線で構成された、甲殻虫を思い起こさせる機兵。所謂量産機である。

>>この前みたいに、勝ってくださいね<<

「最善は尽くす」

>>あー、学生さん、聞こえるかね？ 俺は基地直衛ちよくえいの戦闘機隊『

キマイラ』リーダーの山田やまだ太郎たろうだ<<

今度は若い男の声。そういうえば、欧州戦線帰りの凄腕パイロットがいると、何かのテレビ番組で報じられていた。その名前も、山田太郎だったはずだ。顔出しNGのうえに声も加工されていたため、どんな男なのかはわからずじまいだったが。

椀出の弟、勇は山田に影響されてか、しばらくの間、将来はパイロットになる、と言い張っていた。今となって思えば、懐かしい出来事だ。

>>1機や2機ぐらいなんとかなるが、あんまりコツチの仕事を増

立ち上がれ！ 超機兵！

やさないでくれよ。……ま、あんたらみたいな素人に頼むのは気が引けるがな<<

「善処する」

「が、頑張りますわ！」

>>ま、あまり緊張すんなよ。落ち着いていけば、なんとかなるさ<<

>>山田さんの言うとおりです。平常心、平常心！<<

山田と川崎の励ますような言葉がどこか嬉しい。

>>来ましたよ。敵影、時計の二時方向です！<<

「二時？」

「えっと、北東のことではありませんの？」

『敵影、確認しました。北東です』

「ほら！」

サクラがゆっくりと地面を踏み鳴らしつつ旋回する。周囲はだだっ広い野原だ。これだといくら暴れても文句は言われまい。

「先制攻撃する！ ミサイルは届くか？」

『ミサイル、射程圏内です。ロックオン中……完了』

「よし、ミサイル発射ッ！！」

サクラの肩についているミサイルポッドの蓋が開き、ミサイルが4発連続発射される。ミサイルはそれぞれ目標に喰らいつき、至近距離で炸裂した。

>>命中確認しましたよ。でも、まだ致命弾には至ってません。全部動いています。続けてガンガン攻めてください<<

「ミサイルは……？」

「残りの弾が少ないようですわ。ここは誘い込んで、撃ち合いに持っていったほうがよろしいかと。以前も、敵の弾は効いていませんでしたし」

「よし、そうする！ ショルダーガトリング！！」

サクラの肩から、背中のガトリングほどではないが、かなりの大きさのガトリングガンがせり出してくる。90ミリといったところ

立ち上がれ！ 超機兵！

か。そのまま1機をロツクオン。

「先手必勝だ！！」

椀出がトリガーを引く。ガトリングから吐き出された大量の銃弾が、敵の装甲を穿っていく。が、外れた弾も多い。

「椀出さん、外しすぎではありません？ もう少し慎重に狙ってみては？」

「む、そうか？」

サクラが狙いをつけようとした一瞬の隙。そこにザカートからの弾が三方向から叩き込まれる。激しく揺れるコクピット。

「きゃあああつ！？」

「うおおおつ！？」

が、サクラの装甲は未だに健在であった。表面の塗装こそ剥げているが、行動に全く支障はない。

『損害は軽微』

「やはり、私には細かい動作は向いていないな」

敵の銃弾を浴びながらも、サクラは大雑把な弾幕を張る。その度に振動するコクピット。敵弾の雨の中、畠瀬は生きた心地がしなかった。

「さ、さっきの作戦、言わなければよかったですわー！！」

爆発。モニター越しとはいえ、正面で放たれた閃光に椀出は思わず目を細める。

>>反応、ひとつ消失しました。撃破ですよ！<<

「……あ、確かにレーダーの点が一個消えましたわ！」

「よし、この調子だな」

残った2機は明らかに浮き足立っているようだ。無理も無い。こちらの攻撃は全く通用せず、相手の攻撃はバツチり効いている。

地球の機兵は化け物か。

ザカートのパイロットは思わず下唇を噛んだ。

「一気に決めるッ！！ モンスタガトリングッ！！」

背中から巨大なガトリングガン お化けガトリング が展開され、

立ち上がれ！ 超機兵！

照準を定める。楯出には敵の動きが止まって見えた。トリガーを引く。展開した120ミリガトリング砲から、毎分1600発のペー
スで弾丸が吐き出される。

それは見事に命中した。ザカートがバランスを崩し、地上へ落花
していく。

>> 撃破確認！ 残り一つですよ！<<

>> おおー、やるじゃねーか。ナイスだぜ、学生さん<<

「やるじゃありませんの、楯出さん！」

周囲からの評価に目を細める楯出。これだけ褒められたのは久しぶりだ。テストで平均80点取った時以来か。

>> …… 敵の残り、接近中ですね。重役出勤…………… 速い！<<

川崎の声の調子が一気に変わる。

>> 敵機種確認。………… 『ラジウム』です<<

>> ラジウムだって！<<

山田の声もトーンが落ちた。

「な、なんですの、その『ラジウム』って…………」

>> …… 休戦前に、単機でASEAN連合軍を壊滅させた、恐るべき機体です。注意してください<<

「ちゅ、注意してくださいって………… 楯出さん！ レーダーに反応ありましたわ！！ こつちに来ていますわよ！！」

畠瀬の叫びとも取れる言葉が終わった瞬間、モニターに異形の機
兵の姿が映った。瞬間、モニターに映る景色が空のみとなる。

「きゃあああつ！？」

「つ…………！！ 何が………… あった…………！？」

『敵の肉弾攻撃により、転倒しました。復帰、急ぎます。損傷は軽
微、問題ありません』

ゆっくりと立ち上がるサクラのコクピットの中で、楯出はヘッド
レストに打ち付けられた後頭部をさすりながら、ゆっくりと目の前
のモニターに映る機兵の姿を確認する。前傾姿勢かつ胸を張ってい
るように見える、細身の黒い機兵。骨格が歪んだ人間のようにも見

立ち上がれ！ 超機兵！

える。

単機でASEAN連合軍を壊滅させた、最強の機兵、ラジウム。
「……悪い、遅れたな」

ラジウムのコクピットの中で、パイロットの男が謝罪するかのような口調で呟く。その外見は地球人とさして変わらず、肌の色が青色というだけだ。地球人の感覚からすれば、男前の顔立ちである。

「ここは俺に任せろ。お前は先行して、基地を叩け。残念だが、ザカートじゃアイツの相手はできそうにねえからな」

「りよ、了解！」

「……死ぬんじゃねえぞ」

生き残った1機のザカートが基地に向けて飛び立つ。

「逃げますわよ！？ 追いましょー！！」

>> 学生さん、追うんじゃねえ！！ コッチは俺達がなんとかする！！ あんた等はラジウムに集中しろ！！ 背中から撃たれちゃどうしようもねえぞ！！<<

>> どちらにせよ、ラジウムは放置できる相手ではありません。アカシアもそちらへ向かっています。到着まで、なんとか持ちこたえてください！！<<

二人とも口調が必死である。それが、ラジウムの強大さを示しているようだ。

「俺の名は、『イセイ人』アジア方面軍分隊長、アザン！！ さあ、地球の機兵よ、かかって来い！！ …… あ、いや、先に名乗れ！！」
「貴様に名乗る名前など無い！！」

「よし、では行くぞ、貴様に名乗る名前など無い！！」

>> アザン様、それは少々違うかと<<

アザンは無線に入ってくる淡々としたツツコミを無視し、飛び上がる。刹那、ラジウムのブースターが咆哮した。

「……消えた！？」

「後ろですわっ！！ 回り込まれて……」

複数の衝撃がサクラのコクピットに伝わる。その直後、ラジウム

立ち上がれ！ 超機兵！

の右手に装備されているショットガンから巨大な薬莢が排出された。
「後ろ……クツ、速い!？」

慣性を無視したかのような急加速。重量級のサクラは、ラジウムを捉える事が出来なかった。ラジウムはサクラの周囲を衛星のように飛び回る。そして、定期的にサクラの背後へショットガンを浴びせた。

「……硬いな!! 流石だ、地球の機兵!!」

「くそ、捉えられない!？」

サクラは必死になって動き回るも、ラジウムの姿を正面に捉える事が出来ない。これでは一方的にやられるだけだ。火力はそう高くないものの、装甲の薄い背後を集中的に狙われている。ダメージは徐々に蓄積していた。

なるほど、この速さがASEAN連合軍を圧倒した理由か。

椀出はそう実感する。

『ターンピックの使用を推奨します』

「ターンピック?」

「え、えっと……」

畠瀬が必死にマニュアルを捲る。あった。

「急速旋回用の装置のようですね!!」

「よし、ターンピックを使う!!」

『了解しました。ターンピックシーケンス、起動します』

サクラの右脛の横から、パイルが地表に打ち込まれる。それを軸に、地上をブーストダッシュにて滑っていたサクラが180度反転した。そして、ラジウムを正面に捉える。

「なっ……!？」

「今だッ!!」

とつさの事に一瞬動きが止まるラジウムに向けて、椀出がトリガーを引く。最も取り回しの良い腕部60ミリガトリングガンが火を噴いた。

「グッ……面白いッ!!」

立ち上がれ！ 超機兵！

腕部ガトリングの威力はそう高くは無い。が、装甲と引替えに高機動力を得ているラジウムにとっては、多少の被弾でも大きなダメージに繋がる。被弾し続けるのは危険だ。再び慣性を無視した急加速。

「コツは掴んだ！！ 行くぞッ！！」

椀出はターンピックを的確に使い、ラジウムの捕捉率を上げていく。攻撃こそかわされるものの、アザン本人へ与える精神的な負荷はかなり上がっていた。

「……チッ、仕方ない、一気に決めるッ！！」

ラジウムが一気に前方へ加速。直後、左手から光の刃が形成される。

ラジウムの切り札、艦船を一撃で沈めるほどの威力を持つ、レーザーブレードである。

「椀出さんッ！！」

「大丈夫だ、避けるッ！！」

「いえ、レーザーに新たな反応ですわ！！」

>>……来ました！！ アカシアです！！<<<

>>大將軍か！！ 待ってたぜ！！<<<

「異星人諸君、地球へようこそ！！」

サクラの後方から、1機の機兵が突っ込んでくる。深紅で彩られた、細身の機兵。そして、肩には三葉葵の凶柄。

地球に残された、最後の希望であり、最強の英雄。

その名は、アカシア。

「君達を歓迎しよう！！」

アカシアがそのままラジウムにしがみつき、左手に装備しているアサルトライフルを乱射した。

「ぬうううっ！！！！」

「そして、お帰り願うッ！！」

そして、ライフルの先端に付属している銃剣をラジウムの左肩に突き刺した後、そのまま蹴り飛ばした。ラジウムが地面に叩きつけ

られる。

「待たせたな、椋出君に畠瀬君！」

「……どうして、ワタクシ達の名前を……？」

「到着するまで時間があつた。失礼だが、基地から届いた資料を讀ませて頂いたよ。すまないな、私達大人がすっかりしないせいで、君達のような学生も駆り出すようなことになってしまった」

アカシアのパイロットの声は、落ち着いた良い声だった。どこかで聞いたことのある声。

>>こちらキマイラー、山田。基地へ向かって来てた奴は、コアトル隊と共同にて撃墜した。安心してくれ<<

「山田か。腕を上げたな」

>>まだ大將軍にはかないませんよ<<

山田が無線の向こうで笑つた。どうやら、アカシアのパイロットと山田は旧知の間柄のようである。

>>アザン様、基地へ向かったザカートも撃墜された模様です。：

…伊達にヨーロッパの生き残りではありませんね<<

「な、基地の戦力は戦闘機程度だろ？ ……いい腕をしてやがる」

>>シャイタン様より、撤退命令が出ております。ラジユムの損害も大きく、撤退が妥当かと<<

損害など、言われなくても解つている。先ほど、アカシアから受けた損害は大きい。警告音が鳴り止まない。

「仕方ねえ……。ナスルの野郎に笑われるな」

>>その光景が目には浮かびますね<<

「……地球人！ 貴様等、覚えておくぞッ！！」

アザンの捨て台詞と共に、ラジユムの背中に据え付けられた大型のブースターが火を吹いた。直後、サクラはおるか、アカシアすらも追いつけないような速度でその場から去っていく。

「逃がしたか……。まあいい」

>>椋出さん、畠瀬さん、作戦終了です。帰還してください。お疲れ様でした<<

基地に帰還したサクラを、基地所属のパイロットや整備員が取り囲んでいた。ザカートを2機、さして労せず撃破した機兵。そして、そのパイロットが女子高生となれば、興味を持つのも仕方あるまい。

コクピットのハッチから椀出が顔を出した時、歓声が巻き起こった。

「は、恥ずかしいですわね……」

「そうか？ 別に気にならんが」

椀出がガレージの床に降りた後、畠瀬が梯子を降りようとする。が、下に職員がたくさんいる。椀出はなぜか男子生徒用のズボンを着ているが、畠瀬は普通のスカートなのだ。終わってみると、結構気になる。

「はいはい、彼女はスカートです。上を見るのは禁止ですよー」

川崎の声がした。職員達は今気付いた、といった表情を浮かべ、一斉に目を逸らす。畠瀬は川崎に感謝しつつ、梯子を一段一段慎重に降りて行く。

「お疲れ様。あ、私は川崎ね。疲れたでしょ、これでも飲んで」

川崎は童顔だった。流石に高校生は厳しいかもしれないが、社会人一年生程度に見える。その両手には、グレープジュースとオレンジジュースが1本ずつ握られている。

「椀出さんから選んでくださいませ」

「ん、悪いな」

椀出がオレンジジュースを取り、畠瀬がグレープジュースを取る。……にしても、本当に学生さんかよ。世も末だな……」

「私等がちゃんとしなかったツケだよ。嘆くのは少々筋違いさ」

人ごみの中から二人の男が出てくる。若い……といっても30歳前後といった感じの男と、初老の渋い男。畠瀬は初老の男に見覚えがあった。

「えっと、背の高いほうが榎出さんで、低いほうが畠瀬さんかね？」
「そ、そうですね。よくわかりになられましたわね……」
「カンだよ、カン。俺は山田。さっきは世話になったな。お疲れさん。で、この人が……」

「アカシアのパイロット、七篠権兵衛だ」ななしのしんべえ

「七篠さん？ …………… あの、失礼ですが、前の大統領とそっくりですわね」

「………… 前の大統領？ えーっと………… 足利さんか？」あしかが

「それは前の前の大統領ですわ…………」

畠瀬がため息をついた。

日本は榎出達が生まれる前、そう、数十年前に大統領制へと移行していた。理由は………… 謎である。

畠瀬の言う先代大統領、徳川男児とくがわ だんじは行方不明となっていて、死亡が確認されたわけではない。同一人物である可能性はなきにしにもあらずだが。

「徳川はすでに死んだ。今、ここにいるのは、ただのパイロットの七篠だ」

それって、自分から認めてないか。

どうしてそんな嘘をつく必要があるか納得できない表情をしている畠瀬の横で、榎出が熱い視線を七篠に送っていた。

「榎出さん、そんなタイプがお好きなんですの…………？」

「いや、かつこいいだろう？」

榎出はどうやら純粹に憧れているだけのようだ。少しほっとする

畠瀬。

………… いや、なぜほっとするのだ。違う違う。

「えーっと、榎出さんに畠瀬さん、長官室に来てとのことだよー」
人ごみの影から、川崎が手招きする。榎出と畠瀬は人の間をすり抜けながら、川崎についていき、格納庫を後にした。

「………… 榎出に畠瀬、か…………」

「？ …… どうかしたんすか？」

「いや、可哀相な奴だ、とな……」
七篠はそう呟いて、細い煙草を啜えた。

「ご苦労だった。君たちのおかげで、この基地は守られたよ」

長官室では、村雲が笑顔で出迎えてくれた。

「それでだ、サクラのことだが……」

「この基地に置いてはいけませんの？」

「それがだ、この基地の設備は急造でな。アカシアだけで精一杯なのだ。これ以上機兵を置いておける余裕は無い」

「……と、なると……」

「もう一台分のガレージを急ピッチで用意する。それまでは、君の自宅の地下かね？ 今まで置いてあったところに置いていてくれな
いか？ 無論、整備などは我々が行おう」

「断れないのだろうか？ 構わんさ」

「頼んでばかりだな……すまない」

村雲が頭を下げた。その後、懐から封筒を出す。

「……少ないが、今回の謝礼だ。私のポケットマネー故に、あまり
出せないが……」

「いや、私たちはやらなければならないことをやったままだ。礼を
貰う筋は……」

「いや、貰ってくれ。……この戦いが終われば、制式に謝礼をする。
それまでは……」

「好意ですわ。貰っておきましょう」

「……わかった。有難く貰おう」

桜出が金一封を受け取る。少ない、と言う割には封筒が分厚かつた。

「これからも、よろしく頼む」

「こちらこそ。地球を守るために、私も出来る限りのことをしよう」

二人は一礼をした後、長官室から出る。

立ち上がれ！ 超機兵！

「畠瀬、今日は悪かったな」

「いえ……。大丈夫ですわ。それに、ワタクシ達……」

畠瀬が少し言葉を溜める。

「友達でしょう？」

畠瀬が少々照れ笑いを浮かべる。それを見た椀出もはにかんだ。

「そうだな。謝礼も貰ったから、飯でも食べて帰ろうか。店が開いていたら、の話だが」

「ええ。……ワタクシ、ピザが食べたいですわね」

「悪くないな。よし、帰るか」

椀出が畠瀬の手を取り、大股で歩き出した。畠瀬は少し戸惑うものの、足の速い椀出の手を握り、ついていった。

第二話：大いなる脅威！ アザン登場！（後書き）

畠：ところで椀出さん、好きな食べ物がありますの？

椀：冷奴だな。

畠：また渋いチヨイスですわね……。得意料理は？

椀：冷奴だな。

畠：それって、豆腐にお醤油をかけるだけではありませんの？

椀：違う。青ネギと鰹節、生姜と醤油の微妙なバランス調節、それが難しいのだ。

畠：……。いや、よくわかりませんが。

椀：なんなら食ってみろ。

畠：……。美味しい！？

椀：次回！

「第三の機兵！ シャムロック出撃！！」

お楽しみに！！

畠：……。確かに美味しいですけど、これってお豆腐がいいだけでは……。

第三話：第三の機兵！ シャムロック出撃！！

熱血市

熱血市に敵機兵の襲撃があつてから、二週間が経過した。

その間、椀出達はサクラのメンテナンスついでに訓練を行っていた。アカシアの開発元である高島研究所が提供したシミュレーター。その再現度は非常に高く、椀出の技量向上に役に立っている。

また、畠瀬も少しだけシミュレーターに触っていた。畠瀬はなかなか上手く操作できており、隣で見ていた山田から「畠瀬が乗ったほうがいいんじゃないか？」と茶化されたほどだ。機動や射撃が大雑把な椀出とは正反対の、細かい操作。言うならば、椀出は弾幕、畠瀬は狙撃、といったところだろう。

とはいえ、毎日毎日基地に通っているわけではない。学校もあの日以来休校中だ。

畠瀬は自宅のリビングにて、好物のホットココアを飲みつつのんびりと時間を過ごしていた。半袖のブラウスとショートパンツ。自宅用の服装だ。

「ううー、姉ちゃん、その機体強すぎだよー！！ 反則だつて！！」
「別にそんな事はないぞ。何なら、機体を変えてみるか？」

たまにはこんな時間の過ごし方もいいものだ。機兵さえ来なければ、本当に平和な一日を過ごせる。

のんびりとした、静かな……

「ふええっ！？ 機体とつかえっこしたのに負けたー！？」

「練習が必要だな、ゆー坊」

「……」

畠瀬がテレビが置いてある方向に振り返る。そこには対戦ゲームに興じる椀出と、あと小学校5年生程度に見える子供がいた。

立ち上がれ！ 超機兵！

「アナタ方、遊ぶのは構いませんが……もう少し静かにしていただけません？」

「いや、すまんすまん。テレビが大きいから興奮してな」

椀出は謝っているが、その口調からはあまり反省の色は見えない。畠瀬はまったくもう、と苦笑する。考えてみれば、友達が遊びに来るなど、随分と久しぶりのことだ。

「すみません、押しかけたうえにこんなに騒いじゃって……」

ゲームをしている子供と全く同じ顔をした子供が頭を下げた。いや、髪型が若干違うか。この子のほうがやや長い。

「いや、別に気にしていませんが……。あちらの子とは、双子……ですか？」

「はい。いつも姉がお世話になっていきます。ボクは椀出の妹の、優ゆうつていいます。……あ、優は優しいの優ゆうつて書きます。で、あつちの子が、弟の勇ゆう。勇敢の勇ゆうですよ」

「それは御丁寧に有難う御座いますわ。ワタクシは畠瀬瓜子……つて、アナタ、自分の事をボクつて言いますの？」

「……えへへ、ヘンですよ。でも、昔からずっとこんな感じだから……」

優が恥ずかしそうに笑った。中性的な椀出とはあまり似ていない、女の子らしい可愛い顔立ちだ。当然、彼女と同じ顔である勇も、一見では女の子に見える。

「いや、ヘンじゃありませんわよ。とても可愛いと思いますわ」

これは事実だ。畠瀬は実際にちよつとキユンと来ていたのである。さぞかしモテるのだろう。主に大きなお友達から。

「そつだ。畠瀬、お前もやってみるか？」

「へ？ ワタクシがですか？ そのゲーム、やったことありませんわよ？」

「大丈夫、やったらできる」

椀出が畠瀬にコントローラーを渡す。

「これで動いて、これで攻撃。以上」

立ち上がれ！ 超機兵！

「せ、説明それだけですの！？　せめて説明書を……」

「そうだったら面白くないじゃないか」

桜出がいい笑顔を見せた。畠瀬は不服を言いながらもコントローラーを握り、テレビに向かって座る。

「失礼します」

部屋の中にメイド服を着た女性が入ってくる。留守がちな両親に代わって畠瀬の身の周りの世話をしてきた、鈴木隼子^{すずき じゆんこ}。年齢的には母親代わりというよりも、姉代わりといえる。

「お菓子でもどうぞ。手製ですので、お口に合うかどうかわかりませんが……」

「わ、いただきます」

「こら！　先にありがとうございます、でしょ、勇！！」

「いえ、お気になさらず……」

優と勇を見た鈴木が笑った。美人である。

「畠瀬、お前も……」

「……」

桜出は畠瀬に声をかけるが、返答がない。彼女の眼前のゲーム画面では、畠瀬が操っていた自機が思いつきり爆散していた。そしてゲームオーバー画面。

「畠瀬？」

「……」

再び爆散。いつの間にか畠瀬は正座していた。

「おい？」

「……話しかけないくださりますっ！！」

声だけであるが、畠瀬の今まで見せたことが無い剣幕に思わずたじろぐ桜出であった。

「イセイ人極東方面軍本拠地・飛行要塞「ラクラク」

立ち上がれ！ 超機兵！

大量の機兵が整然と並んだ格納庫の中で、アザンは愛機の前で仁王立ちとなっていた。

細身の黒い機兵。機体各所のシャープな造形が美しいと思う。

アザンの愛機、ラジウム。ザカートの上位モデル「セルジューク」の装甲を削減、軽量化し、高性能のブースターを搭載した、高機動モデルである。その分、防御力と火力は削減されており、搭載しているブースターも癖がある。スロットルが一定の開度に達したとき、例えるならば自動車の過給機が作動したときのような、爆発的な加速をする。ため、扱うには慣れと技術が必要となる。ピーキーな機体であるため、乗り手は非常に少ない。が、アザンは気に入っていた。

ようやくここまで修復できた。二週間前に地球の機兵から受けた損害はかなりのもので、左腕を丸々取り替えたほどである。地球人の粘りは相当のものであり、最も普及しているザカートの予備パーツですら不足し始めているのだ。乗り手の少ないラジウム用の予備パーツはさらに少ない。パーツの半分以上はセルジュークと共用であるのがせめてもの救いか。

地球の機兵は強い。それは他ならぬ自分がよく理解している。

だが、次は負けない。一度負けた相手には二度負けないというのが、イセイ人 現在地球を侵略している人種 の教えである。

「ソツチに一機回すぞー！！ どいたどいたー！！」

機兵の外部スピーカーから整備兵の大声が格納庫に響いた。白地にとどこどころ青と黒、そして金の混ざった派手なセルジューク。純正のカラーリングではない。もはや。

「あ、アザンの旦那でしたか。サーセン」

「いや、気にすんな。それよりも、そのセルジュークは……？」

「ナスルさんが帰還してきたんすよ」

ナスルはアザンと並び称されるエースパイロットである。イセイ人の再侵攻が始まった一ヶ月ぐらい前から中国戦線に赴いており、

彼が帰ってきたということは、中国戦線は一段落ついたということか。

「おー、じゃあチャイナのほうは片付いたのか？」

「それがねえ、連中しぶとくて、完全に泥沼化だ」

整備兵とは別の声。アザンはわざとらしく周囲を見渡す。

「誰だツ！？ スパイか！？」

「違う！ ここだ、ここ！！」

「卑怯者め、姿を現せ！！」

周囲を見渡すアザンの前に、指を下に向けた手が差し出される。

「見下〜げて〜ごらん〜」

声につられて、アザンは下を向く。そこには、子供ほどの身長の子が立っていた。

「ナスル！？ いたのかよ！！」

「わざとらしいな、おい」

彼がイセイ人の中でもトップクラスの腕前を持つ男、ナスルである。アザンの前にある専用カラーのセルジュークを駆り、各地で大な戦果を上げていた。アザンとは同期であり、エース同士、仲もいい。年齢は地球でいうところの二十代後半であるが、その身長は子供と大して変わらない。いわゆる「ちっさいおっさん」である。

「地球人もアカシア以外の機兵を使いだしたって？」

「ああ。ピンク色のごつい奴だ。速さはそうでもねえが、とんでもなく硬い。ま、パイロットはまだ動きがぎこちなかった。素人だな」

「つてことは……連中もそろそろ本格的に機兵を使いだすってことか？」

「だろうな」

二人は先ほどまでのふざけあっていた表情とは一変した、真剣な表情で会話を進める。

イセイ人は「宇宙の地上げ屋」と呼ばれる、惑星侵略専門の民族である。これまでも数多くの惑星を制圧し、他の星に売り渡していた。今まで制圧してきた星は、ほとんど一ヶ月もしないうちに片が

立ち上がれ！ 超機兵！

ついている。一年以上粘っている地球の奮闘は予想以上なのだ。それどころか、イセイ人の専売特許であった機兵すらも実用化しつつある。

「とりあえず、コッチはチャイナかジャパンか……。どっちかを先に終わらせないと、だな」

「チャイナじゃねーの？ 俺と入れ替わりでカロンの嬢ちゃんが来てたからな」

「ああ、そういうことか。カロンの奴、道理で姿が見えないと思っただ」

アザン、ナスルに続くもう一人のエースパイロット、カロンのダークブルーと白のツートンカラーのセルジュークを駆る、天才とも評されている少女である。

「それよりもだ、ジユウケイか？ あそこの地下に大規模な工場があるのが確認された」

「大規模な工場だつて？」

「ああ。機兵を作ってるようなサイズだ」

一般的な機兵のサイズは15メートルほど。それを製造する工場は、かなりの大規模なものとなる。重慶地下で確認された工場は、中に何も残ってはいなかったものの、それらしい痕跡は見受けられた。通常兵器にはオーバーなハンガーに加え、施設の規模。

まさか、機兵の量産工場とでも。アザンはその言葉を口に出そうとするが、それと同時にPHSの呼び出し音が鳴った。発信元はブリーフィングルーム。呼び出しと見て違いないだろう。

「悪い、呼び出した。また後でな」

「ああ、了解」

アザンは手を振って、ブリーフィングルームへと向かった。

先の疑念は、杞憂であってほしいものだ。そう願いつつ。

熱血市・畠瀬宅

立ち上がれ！ 超機兵！

「ち……ちくしょう……！」

ゲームに集中していた畠瀬は何度も負けていた相手を打ち倒すことによりやく成功した。何度負けたか解らない。

「やりましたわー！ 倒しましたわよ、椋出さんー！」

「おお、よかつたじゃないか。おめでとう」

畠瀬が派手なガッツポーズを取る。普段とは大違いのはしゃぎっぷりだ。椋出は今まで読んでいた少女漫画誌を伏せ、畠瀬に笑顔と拍手を送る。

「ホントに苦労しましたわ……。もうダメ……」

『所詮捨て駒か。まあいい』

画面にもう一体の敵が映る。畠瀬が浮かべていた得意気な表情が一瞬にして消えた。

「……へ？ あ、あの、何か出ましたけど……」

「ああ、そこは敵がもう1機出るぞ」

「そ、そんなことは先に言ってくださいませんか！？」

自機に残された体力と弾数は残り少ない。勝てる道理が無い。

「あ、わかりましたわ！ これって負けて進むイベントでしょう？」

「違つぞ」

椋出の言葉と同時に、自機が爆散し、ゲームオーバー画面となる。

「そんなー！？」

「よし、じゃあ私が手本を見せようか」

畠瀬のプレイ画面を見ていた椋出は、ゲームをしたくつづつしていたのだった。そう、椋出はヘビーゲーマーである。指先をわきわきと動かしながら、畠瀬の横に座る。

「いーえ！ 結構ですわー！ このままじゃ眠れませんー！」

「まあまあ、セーブしないから、どうやって倒すかの参考にでも……」

電子音。椋出の携帯電話からだ。相手を見てみると、花園基地か

立ち上がれ！ 超機兵！

らである。

「……基地からだ」

「え？ ……まさか……」

一瞬で場の空気が固まった。椀出が電話に出る。

『もしもし。花園の村雲だ。今、いいかね？』

「別に構わないが」

『では、単刀直入に言おう。花園に敵が接近している。大至急こちらへ来て、迎撃して欲しい。アカシアと七篠君は現在北海道に出撃して留守だ。……今はどこに居るのかね？』

「畠瀬の家だ。わかった。すぐに行く」

『畠瀬君の家だな。では、今から川崎を迎えにやらせる。頼んだ』

電話は切られた。

「畠瀬、敵が来ているらしい。私は今から基地に行く。川崎さんが迎えに来てくれるそうだ」

「敵ですよ！？ ワタクシも……」

畠瀬の言葉を遮るかのように、椀出が畠瀬の前に手を突き出す。

「ダメだ。畠瀬はここにいろ」

「どうしてですよ！？ ワタクシがいないと……」

「サクラの操縦は一人でも出来る。これ以上お前を巻き込みたくない」

「そんな……水臭いですわよ！ ワタクシと椀出さん、友達でしょう！？」

「友達だからこそ、だ。……妹と弟を頼む」

椀出はそこまで口にして、畠瀬に背中を向けた。追いつがるうとする畠瀬を鈴木が制する。

「隼子さん、放してくださいませ！」

「いえ、私にはお嬢様を止める義務があります。お許しください」

「お姉ちゃん……」

「姉ちゃん……」

優と勇の不安げな声。椀出は少しだけ振り返る。

「ゆー坊、ゆーちゃんを守ってやるんだぞ。それが、男の子の勤めだからな」

「……うんっ！」

勇が少し戸惑うも、姉を心配させまいと精一杯の笑顔を見せた。それを見た椀出も微笑を浮かべる。

「いい男だ。……じゃ、またな。畠瀬、帰ってきたらお手本を見せてやるから、あの面をクリアしろよ」

椀出が家を出た。畠瀬の住所は事前に伝えている。じきに迎えが来るだろう。

今までに経験してきた二度の実戦では、いつも後ろに畠瀬がいた。自分とは違う視点で戦いを見れる存在。だが、今回は一人だ。怖くないと言えは嘘になるが、いつまでも畠瀬の世話になる訳にもいかない。いつかやらないといけないことだ。

やけに五月蠅い音がする。俗に言う「走り屋」と呼ばれる人達が平和なことだ。そんなことを考えているうちに、椀出の前に一台のライムグリーンのバイクが止まる。そのライダーは小柄で、女性のようにだった。

「椀出さん、お待ちせ！」

ライダーがフルフェイスヘルメットのシールドを上げる。川崎だった。

「川崎さんか？」

「そ、早く後ろに乗って！ ちょっと足とクッション硬いけど、我慢してね！」

川崎がリュックから小ぶりのジェットヘルメットを取り出す。これを被れということだろう。

「ごめんね、私、大型は持つてるけど車の免許は持ってないの」

「ああ、大丈夫だ。それよりも……」

「うん、飛ばすよ！ しっかりつかまってて！！」

椀出は川崎のバイクの後ろに座り、川崎にしがみつく。と同時に、川崎はバイクを発進させた。600ccのスポーツーツ。街乗

りのことは全く考えられていないような設計で、椀出の尻を振動が容赦なく襲う。

よくこれで出勤してるものだ。椀出は少し呆れた。

「お嬢様……」

玄関から椀出が走り去っていった後をずっと眺めている畠瀬に、鈴木が声をかける。が、畠瀬は微動だにしなかった。

「……椀出様のことが心配なのですか？」

畠瀬は答えなかった。ただずっと、椀出が走り去った後を見つめ続けている。

「あの、畠瀬さん、姉ちゃんならきつと大丈夫だよ」

勇のおずおずとした声。

「なんでかはわかんないけど……そんな気がするんだ」

「勇君の言うとおりです。今は、椀出さんを信じるだけです」

姉の事が心配なのか、少し震えている勇を鈴木が後ろからそっと抱きしめる。大人の女性に抱きしめられることなど初めてな勇は少し赤面するが、優の咳払いで慌てて鈴木から離れた。

「……ワタクシは、椀出さんの役に立ちたいんです」

畠瀬は淡々としつつも力強い口調で言葉を発した。その小柄な手のひらを硬く握り締めて。

「地球のためじゃなく、ワタクシは、友達のために……好きな人のために、戦いたいんですのっ！」

畠瀬が振り返った。その顔は激情を抑えるかのように紅潮しており、目尻に光るものが見える。

「……」

鈴木は畠瀬の強い語気で思わず俯く。その仕草は何かを隠しているかのようだった。畠瀬はそれをすぐさま見破る。

「隼子さん、何か……隠していますわね？」

「……」

立ち上がれ！ 超機兵！

「……では、命令です。地下の鍵を貸しなさい」

畠瀬家には開かずの地下室があった。その鍵は鈴木が管理しており、畠瀬の手に入ることは一度もなかった。畠瀬は地下に何があるのか知らない。ひよっとしたら椀出の家と同じように、機兵があるかもしれない。その可能性は極めて低いものの、調べてみる価値はある。ありえないことかもしれないが、それでも構わなかった。

「……」

「隼子さん」

「……かしこまりました。私の後について来てください。優ちゃん
と勇君は、居間にいて下さいね」

「う、うん。行く、優」

「……あの、畠瀬さん、無茶はしないでくださいね……？」

「……ええ、わかっていますわ」

鈴木が今まで開けることのなかった、地下室へつながっている扉の鍵を開ける。地下特有の、ややすえた臭いが畠瀬の鼻をついた。綺麗に作ってある地上とは違い、地下はコンクリートむき出しの愛想のないつくりだ。

長い階段を一步一步下ると、その先には、広い空間があった。椀出の地下で見たのと似た光景。

「鈴木さん、これは……」

「……お嬢様には内緒にしておりましたが、旦那様と奥様は、人知れず機兵の研究をしてなさいました。その結果が、これです。時が来たら、お嬢様を乗せるように言われておりました」

「……これは……機兵!？」

〈花園市・郊外

>>椀出さん、敵は現在接近中。数は5機ですよ。ザカート4機と、

ラジウムが1機ですく

「ラジウム……またあいつか？」

>>……パイロットまでは特定できませんが、その確率は高いですねく

サクラは前回迎撃に出たのと同じ広野に展開していた。周囲には何もなく、思う存分暴れても何も言われぬような場所だ。

前回苦杯を舐められかけたラジウムの相手をしなければならぬ。前回の勝利は七篠が乱入してくれたおかげであり、あのまま戦っているのは勝てたかどうかわからなかった。辛い戦いになるのは目に見えている。

>>聞いているとは思いますが、アカシアは現在北海道に出撃中です。あなたの助けにはこれせんから……く

「ああ、聞いている。大丈夫だ、きつと勝てる」

>>学生さんはポジティブだねえ。若いつて羨ましいぜく

サクラの傍には山田率いるキマイラ隊の戦闘機が3機飛行していた。0式の翼の下には、対艦ミサイルが2本懸架されている。0式は世界水準に倣った万能機マルチロールであり、対地攻撃も不足なくこなせる。

複数の機体による包囲しての一斉攻撃。これはヨーロッパに義勇兵として赴いていた先代大統領の徳川が発案した戦術だ。単純ながらも効果のある戦術として、広く使われている。

前回は戦闘機隊は全て基地の防衛に回されていたが、今回は残りの戦闘機隊であるコアトル隊が担当するらしい。この戦争で、徐々に予備品が不足しつつあり、戦闘機の稼働率は下がる一方だ。

「……ところで川崎さん、普段はタメ口なのに、こうなると丁寧語になるな。どうしてだ？」

>>そつちのほうが気分が出るじゃない？ ……あ、忍者口調で説明しよつか？ 殿！ 敵が来ているでござる！ ……なーんてく

>>そいつは面白いが、カンベンしてほしいなく

>>じゃあ山ちゃんには女王様っぽく言ってあげましょ。敵が来るわよ！ 何もたまたしてるの！ 使えないわね、この屑！ みた

立ち上がれ！ 超機兵！

いに<<

>>もつとカンベンしてくれよ……<<

山田が苦笑する。椀出としては、忍者オペレーターも悪くないと思っていたのだが。

『どこが面白いのでしょうか。私はよく理解できません』

「サクラはギャグとかわからないのか？」

『はい。申し訳ありません』

「いや、謝ってもらわなくてもいいのだが」

そういえばなぜ丁寧語なのかの謎が解明されないまま、アラーム音が鳴った。何か計器でもイカれたのか。椀出は慌ててコクピット内を見渡す。今までは畠瀬がやっついていてくれたことだが、畠瀬はいない。仕方のないことではあるが。

『基地からの無線です。重要なのでアラームがついているようです』
ね

>>サクラ及びキマイラ隊に通達！！ 敵機兵5機、作戦領域内に到達！！<<

エラーではなかった。ふと考えてみれば、システムエラーが出た場合はサクラがチェックでもしてくれるはずだ。慌てた自分が少々馬鹿らしい。

>>了解した！！ 鹿島、坂崎、椀出！！ これより状況を開始する！！<<

>>R o t h e r , t h a t ! ! <<

>>了解！！<<

「りよ、了解！！」

『戦闘システム、起動』

キマイラ隊は散開、サクラは滑走用のブーストに火を入れる。

>>こちらキマイラ2、鹿島だ。椀ちゃんよ、頑張つて敵を引きつけてくんない！ そこを俺達がドーンだ！！<<

「ああ、わかった！ サクラの装甲は、連中の悪に染まった銃弾などに貫かれはしない！！ 任せてくれ！！」

立ち上がれ！ 超機兵！

>>……暑苦しい女子高生だ<<

>>元気があつていいだろ。それよりも坂崎、わかっているな<<

>>アフターバーナーの使用は禁止。だろ？<<

0式戦闘機は超音速機である。当然アフターバーナーもついているが、燃料を大量に消費するために、自前の燃料がかなり限られている現状では離陸時及び緊急時以外の使用は禁じられていた。

>>鹿島もだ！ 調子に乗って落ちるんじゃないぞ！<<

>>わかっているわかつてるっ！<<

賑やかな無線である。どうして花園基地にはこうも賑やかな人が多いのか。

「アザンさん、敵はすでに展開してます！」

「やっぱり地球のリーダーは優秀だな、オイ！ まあいい、今回こそ片付けるぞ！」

黒いラジウムを先頭に、4機のザカートが突っ込んでくる。

「ピンク色のごつい奴……この前のか！！ お前ら、あの機兵は俺がやる！！ お前らは戦闘機をやれ！！」

「了解！！」

ザカート4機が散開した。狙いは山田達のような。そう思い通りにさせるわけにはいかない。椋出は散らばったザカートに照準を合わせる。

『警告、敵にロックオンされています』

サクラの警告に、椋出はとっさにサクラを横に滑らせる。直後、ショットガンの散弾が地面に大量の穴を穿つ。

「いい勘してるじゃねえか！！」

ラジウムが着地する。改めて見ると、やはり異形の機兵だ。全身を包むつや消しの黒い装甲が、太陽の光を吸収しているかのようだ。「けどな、これまでだっ！！」

サクラの方を向こうとするラジウムの腕から、徐々に光の刃が伸びていく。

>>椋出さんッ！！ 距離を取ってッ！！<<

立ち上ぐれ！ 超機兵！

「わかつてるっ！！！」

椀出は腕部ガトリングガンと、この作戦前に高島研究所から送られてきた携行武器の120ミリライフル砲 背部の120ミリガトリング砲と同じ弾を使用する で弾幕を張りつつ、サクラを一気に後退させる。

「野郎ツ！！ 舐めたマネをツ！！！」

ラジウムはそれを、全ブースターの推力を一点集中させることによる横方向への爆発的な加速でもって避ける。アザンの得意技であり、この瞬発力を自在に操れるところが 並のパイロットなら姿勢制御できずにバランスを崩してしまう 彼のトップエースたる所以である。

「くそっ、何だ今のは……」

ラジウムの慣性の法則を無視したような、詐欺じみた機動に椀出は苛立ちを隠せない。どうやって当てるというのだろうか。

>> 椀ちゃんよ、ザコートどもは俺達に任せて、そっちに集中してくんな！<<

>> ザコってなんだよ、ザコってのは<<

鹿島は余裕しゃくしゃく、といった調子で飛び回っている。確かに緩急を上手くつけた、狙いを絞らせない動きである。その動きに翻弄されたザコートが1機、編隊から突出する。

>>……坂崎！！ 1機飛び出た！！ やるぞ！！<<

>>了解！ キマイラ3、マグナム！！<<

>>キマイラ2、マグナムツ！！<<

鹿島機と坂崎機の翼下から、1式対艦誘導弾 対艦ミサイル が1発ずつ発射される。それらは突出したザコートを挟み込むかのように食らいついてゆき、1発は至近距離で炸裂、もう1発は直撃した。元々対艦用として開発されていただけあって、火力は一級品である。直撃を受けたザコートは、爆発と共に四散した。

>>よっしゃあっ！！ 1機仕留めたツ！！<<

鹿島がとても嬉しそうに叫ぶ。一方、ザコートの編隊は動揺し始

立ち上がれ！ 超機兵！

めている。連携が乱れつつあった。その中に、明らかに動きのおかしい機体が混じっている。速度が妙に低い。

>>隊長よ、1機ヨタヨタしてるのがいるぜ？<<

>>こちらキマイラー1、確認した。どうもブースターの調子がおかしいみたいだな<<

山田の推測どおり、そのザカートはブースターが不調のようだ。必死で後退しようとしているが、時すでに遅し。

>>どうする？<<

>>決まってるさ<<

山田がスロツトルを一気に開け、動きのおかしいザカートへ詰め寄る。

>>落とす！！ 鹿島、ついて来いッ！！<<

>>そう来ると思ってたぜ！ 坂崎、後ろは任せた！<<

動きのおかしいザカートを囲むような形でキマイラー隊の3機が配置につき、山田機と鹿島機からミサイルが放たれる。不調のザカートがそれを回避できるはずもなく、2発のミサイルが直撃、ザカートは四散した。

「……畜生、てめえら、ただじゃおかねえぞっ！！」

サクラが張る弾幕を避けることに専念していたアザンだったが、その動きを一変、被弾覚悟で前進しだした。

「ハエどもは俺が必ず叩き落すッ！！ このデクの棒を仕留めてやらなッ！！」

言葉の端々に憤りを感じさせながら、アザンが駆るラジウムがレーザーブレードを展開させて突っ込んでくる。

「くそ、コイツ、捨て身なのかッ!？」

桜出は必死にサクラを後退させながら弾幕を張る。が、ラジウムの勢いは止まらない。ライフルが数発直撃しているが、意に介さぬ様子だ。

相打ち覚悟の特攻か。レーザーブレードの威力は前回対峙した時に嫌というほど聞いている。人の忠告を無視するほど桜出は愚かで

立ち上ぐれ！ 超機兵！

はなかつた。

>> 敵機の間合いよツ！！ 椋出さん、避けてツ！！！！<<

川崎の悲鳴に近い呼びかけと同時に、ラジユムの腕が振られた。

とっさに身をひるがえして回避するも、レーザーで作られた刀身が、サクラの装甲表面を融解させる。塗料が焦げる、嫌な臭いが立ち込めるが、そんなことを気にする者はいなかつた。

『装甲表面融解。防御力、低下しています』

先の一撃は紙一重でかわしたものの、ラジユムの攻撃が止む気配はなく、第二撃が繰り出される。それは、サクラの左腕部ガトリングガンの銃身を焼き切つた。

少しずつ、敵の攻撃が近づいてきている。椋出の頬を伝う汗は少しずつ増えてきていた。

このとき、各機のリーダーに小型機の反応があつたが、それに気づいた者はアザンのみ、そしてアザンも単調な動き、かつ攻撃してくる気配のないその反応は脅威ではないと判断し、無視する構えであつた。

『左腕部ガトリングガンの装備解除を推奨』

「わかつてる！！ 切り離してくれツ！！」

あくまでも淡々としたサクラの音声とは対照的に、椋出の声には恐怖と焦りが込められていた。

こつちに来るな。その一心で、ロックオンもせずひたすらトリガーを引き続け、後退用のブースターを吹かし続ける。無論、そのような攻撃がラジユムに命中するはずもなく、ただの虚しい延命処置に過ぎなかつた。

>> 椋ちゃん、大丈夫かいツ！？<<

>> 鹿島、後ろツ！！<<

キマイラ隊も動けない様子だ。無理もない。仲間を二人も失つたザカートのパイロット達は、本気で山田達を落としかかっていた。「ケツ、しぶといじゃねえかツ！！」

『警告。ブースターの残りエネルギー僅か。警告。銃身過熱。射撃

立ち上ぐれ！ 超機兵！

プログラム、中断します』

ライフルの射撃プログラムがカットされ、サクラからの弾幕が明らかに減少する。また、後退速度も目に見えて低下していた。

好機と踏んだアザンは、決着をつけるべくラジユムの左腕を振り上げて、そのままサクラに詰め寄ろうとする。椀出はその様子が極めて緩慢に見えた。前回追い詰められた時とは全く違う感覚。

死ぬ前には周囲の景色がゆっくりと見えると聞いた。それなのだろうか。足元が震えている。

「やられる……？ ……山田さん、七篠さん……」

操縦桿を握っている両手にびっしりと汗をかいている感覚があった。空調は利いているはずなのに、背中も、尻も、足元も、汗でぐしょぐしょに濡れていた。

怖い。

「助けて……」

椀出の声は震えていた。

自分はここで一人、この狭い空間で、死んでいくとでもいうのだろうか。

大切な妹と弟にも、畠瀬という大切な友人にも、もう会えないとこののだろうか。

そして、目の前が光で覆われた次の瞬間、椀出は目を閉じた。

振動と異音で目を開ける。

そこには、ラジユムがもんどりうって倒れ込んでいる姿があった。

>>椀出さん、大丈夫ツ！？<<

何が起こったのか、理解できない顔でいる椀出だったが、川崎からの無線で我に返る。

「あ、ああ、大丈夫だ。死ぬかと思ったが……。何があつたんだ？」

>>ラジユムに攻撃があり、どうやらバランスを崩して転倒した模様です<<

生き残った。椀出は安堵のため息を漏らすと同時に、思わず股間

立ち上がれ！ 超機兵！

を探っていた。濡れていない。大丈夫だ。

>>リーダーに反応……熱血市に機兵の反応！？ それも防衛軍の識別信号ですッ！！<<

ラジウムがゆっくりと立ち上がるうとする。左腕の肩から下がもぎ取られていた。行き場を失った電気系統の配線がバチバチと火花を発している。突っ込んできている最中に左腕を失ったのだ。バランスを修正する暇もなく、そのまま転倒したのであるう。

「……椀出さん、お待たせしましたわね！！」

無線に飛び込んでくる、聞き慣れた声。

「畠瀬瓜子！ 及び、機兵『シャムロツク』！ ただいま助太刀に参りましたわッ！！！」

>>嘘、熱血市の機兵って、畠瀬さんが……！？<<

「椀出さん、ごめんなさい。いてもたってもいられなくて……」

何と言えいいのかわからない。椀出はただ、眼前のモニターに写っているラジウムの姿を凝視していた。温度センサーを見れば、ライフルとショルダーガトリングの銃身温度は少しずつ下がっている。

「一度ならず二度までも……」

ラジウムが立ち上がった。右腕のショットガンのみで眼前の機兵を仕留められるはずもなく、視界外からの砲撃もある。

絶望的な状況だ。

>>アザン様、撤退命令です<<

「……」

>>これ以上戦力を失う訳にはいきません。どうかここは<<

「……解ってる」

アザンは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ、ラジウムを空高く飛翔させた。

「撤退するぞー！！」

アザンの号令とともに、キマイラ隊と戦っていたザカート2機もその身を翻し、撤退を始めた。

立ち上がれ！ 超機兵！

>>野郎、逃がすかよッ！！<<
>>鹿島、止める！ 燃料も残り少ない、これ以上の追撃は不可能だ<<

>>…… 作戦本部も、敵の進行を止めただけで十分な戦果であるとの判断を下されました。帰還してください<<

川崎の無線の背後には、司令室からの安堵の音がいくつも混じっていた。サクラは重要な戦力であり、それが破壊されなかった、そして、畠瀬の機兵という新たな戦力の追加。ホツとしないほうがおかしいのかもしれない。

>>椋ちゃん、どうした？ ずいぶんと大人しいじゃねえか<<
>>最初の勢いはどこに行った？<<

鹿島の心配そうな声と、坂崎のからかうような声。普段なら少々腹を立てるものだが、今日ばかりは違った。

「怖かったんだ。自分が死ぬかと思つて、本当に怖かった」

椋出の元氣のない返事に、からかおうとしていた坂崎も言葉を詰まらせたようだ。

>>素直でよろしい。誰だって死ぬのは怖いんだからな。それに、椋出はよくやったよ。あと、畠瀬<<

「は、はいっ！！」

>>勇敢だったよ。助かった<<

「い、いえっ！！ ワタクシがお役に立てたのなら、何よりですわっ……！」

>>よし、状況を終了する！！ キマイラ隊及びサクラ、シャムロツク、これより帰還するぞ！！<<

山田の言葉に、全員が返事を返した。

「……やはり、地下にあった機兵に乗ったら、操縦方法がわかった」と

基地へと帰還した椋出と畠瀬は長官室に呼び出されていた。村雲はいつになく厳しい表情を浮かべている。

「はい。なぜかはよくわかりません。ですが……」

「君達はいつたい何者なのだろうな。私には皆目検討がつかんよ」
村雲が苦笑する。

「……そういえば、ワタクシの家の使用人が、ワタクシの両親が研究していたものと言っていましたわ」

「君の両親が？」

「はい。両親は海外出張と聞かされていたのですが……」

「……私の両親も何かを研究していた。内容は知らないが」

「……ふむ」

村雲はあごに手を当てて、しばらく何かを考えていた様子だったが、その様子を解き、ポケットから紙封筒を出す。

「今日はお疲れ様だった。少ないが、謝礼だ。とっておいてくれ」

「……はい、ありがとうございます」

動こうとしない椋出を背に、畠瀬が封筒を受け取る。先日と同じぐらいの中身のようだった。先日貰った謝礼ですらまだ余っているというのに。

「それでは、もういいぞ。時間を取らせてすまなかった。畠瀬君、

これからもよろしく頼む」

「りよ、了解いたしました!!」

椋出と畠瀬が礼をして、長官室から出て行く。その後姿を見送った村雲は、傍にいた秘書に高島研究所へ電話をつなぐように指示をした。

格納庫の前を、椋出と畠瀬は二人で歩いていた。作戦後の喧騒も一通り済んだ後らしく、人通りは少ない。

「椋出さん、今日はごめんなさい。ワタクシを巻き込まないように

してくれたのに……」

畠瀬の前を歩く椀出は無言のままだ。ただ、相変わらずの早足で、送迎してくれるという山田の元へ向かっていた。

「……畠瀬」

椀出が立ち止まって、振り返る。

「お前がいなくて、私は本当に心細かった」

必死で平静を装っているものの、椀出の目尻に浮かんだ光るものを畠瀬は見逃さなかった。

「……助けてくれて、ありがとう」

椀出はそのまま畠瀬を抱き締める。声の端が震えていた。

「……大丈夫ですわ。だって、ワタクシ達は……」

畠瀬も戸惑いながら椀出の背中に手を回し、そのまま抱き締める。

「友達でしょう？」

椀出は返答せずに、畠瀬のそばでただ泣きじゃくっていた。

「お姫様方はホント遅いな……」

「長官のありがたいお話でも聞いているんじゃないかねえか？」

山田をはじめとするキマイラ隊の三人は、山田の愛車である7人乗りのステーションワゴン風ミニバンの前で喋りこんでいた。

「あ、お疲れさまー」

そこをヘルメット片手に川崎が通っていく。彼女はやや赤面していたが、それが何を意味していたかは……謎である。

第三話：第三の機兵！ シャムロック出撃！！（後書き）

川：車載動画ってやつを撮ってみたよ！

椀：どれどれ？

畠：……なんだか心臓がきゅんってなりそうですわ。

川：え、惚れちゃった？

畠：違いますわ！！ 見ていて怖いんですの！！

椀：でも、これだけのスピードで走れるんだな。凄い。

川：えへへー。

畠：……でもこれ、明らかに法定速度を超過していませんか？

川：庭で撮ったから大丈夫よ！！

畠：対向車が来るって、立派な庭ですわね！？

椀：次回！

「超機兵の真実！ 研究所の影！！」

お楽しみに！！

畠：車はお金をかけて速くなる。

バイクは命をかけて速くなる。

久しぶりに更新です。

川崎のバイクとか山田の愛車とか、明らかにモデルがあつたりしますw

立ち上がれ！ 超機兵！

立ち上げれ！ 超機兵！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764e/>

立ち上げれ！ 超機兵！

2008年11月7日07時06分発行